
はじめに

4年前だったか。ある学会（神経科学会だと思う）で疲れたので座りヒマそうにしていたら、知り合いの出版社の編集者に声をかけられた。教育のことなど世間話をしていたなかで、「最近、神経科学のことをざっと知るための入門書がないかなあと言う声を、学生さん達からよく聞くんですよねー（ちら）」みたいな感じで振られた。その場では「一人で書くのはなあ」とか返事をしたのだが、当時は京都大学やコロンビア大学で解剖や神経解剖の教育のお手伝いをしていて、学生さん達とのつきあいもあり、わかりやすく神経科学のおもしろさを伝えられるような方法がないかなあと感じていた。カンデルの本とか、スタンフォードの本とか、少し古いけどペラーの本とか、学部生向けの“ちゃんとした”神経科学の本は沢山あるけれど、どれもかなり厚くて読み切ろうと思うと心が折れる。病気に関係することについては『病みえ』のような（陰の？）名著もあるけれど、必ずしも病気に関わらない人達が神経科学の全体像をざっと捉えるのに適した入門書ではない。ちょうど同じ頃、大学院で医学部卒以外の方に医学を教えるようなことにも関与し、さらに中高生向けに『脳科学オリンピック』のお手伝いをするような機会もあり、「それじゃあやってみるか」と、エライ先生達に非難されるのは承知の上で、持ち前の図々しさで執筆を引き受けたことにした。

この本は Chapter 0～8 の 9 章からなり、ヒトの脳を様々な角度からざっと説明することを目指しているが、細かいことはかなりはしゃつてある。どちらかというと、原則とか原理とかそういうことを意識しながらまとめてみた。対象は医学、生物学、あるいは心理学の側面から神経科学に興味がある学部生、大学院生。さらに情報科学、工学への応用

のため神経系の情報処理のメカニズムに興味のある人。神経科学でハーダルが高い解剖のところは Chapter 5 と 6 の 2 章にわけて書いてある。特に Chapter 6 は自分なりに凝ってまとめてある。解剖は名前とつながりがネックになるのだけど、進化や発生から考えてみるとわかりやすくなるという信念（妄想といってもいいかもしれない）のもと、そういった知識が情報処理の原理の理解につながらないかという感じで書いてある。この意図が成功してるかどうかは読者の方々の判断に任せる。

最後に、図も含めて編集に根気よくたずさわってくれた知り合いの出版社の編集者＝羊土社の間馬さん、原稿を読んでくれ励ましたくれた京都大学医学部の学生さん達に感謝したい。

2020 年 8 月
櫻井 武